



春風社 2,916円(税込)

幻想と怪奇の英文学

下楠昌哉(天文学部教授)他著

「幻想と怪奇」。一九七〇・八〇年代に本の虫として青春時代をおくった人々であるならば、このフレイズに蠱惑されずにはいられない。平井呈一、紀田順一郎、荒俣宏、東雅夫といった伝説的翻訳家あるいはアンソロジーストたちによって、この言葉が表す文学ジャンルは日本の出版界で市民権を得た。反面「幻想文学」「怪奇文学」といったジャンルだてに、日本独自の枠組みが出来上がってしまったのも確かである。日本で「幻想」あるいは「怪奇」と呼ばれている作品、あるいは日本における「幻想と怪奇」の研究を外国語で発信する



ハーベスト出版 1,296円(税込)

旧石器が語る「砂原遺跡」

遙かなる人類の足跡をもとめて

松藤和人(天文学部教授)・成瀬敏郎著

島根県松江市砂原遺跡の発見とその後の発掘調査は、日本の旧石器文化研究の転機となったといつてよい。

旧石器遺跡発掘掘造事件のありで、4万年を超えるとされた遺跡が懐疑の目で見られていたさなか、地質学、自然地理学などの関連分野の研究者を含めた学術調査で丁寧に発掘された砂原遺跡は、最古の日本列島の住人に対する関心を再び呼び起こし、東アジアにおける前・中期旧石器時代の研究に日本列島を加えることを可能とした。

ための第一歩。本書は間違いなく、そのメルクマールになると信ずる。それと同時に、「幻想や「怪奇」という言葉を躊躇うことなく使った時、英文学を扱った硬めの内容であるはずの論文がこれほど面白く読めるようになる」と気づかされたのは、本書の編集作業に際しての嬉しい発見であった。

本書は怪談雑誌「幽」編集長、東雅夫氏の同志社大学英文学会での講演をきっかけに、その年度の大会準備委員長であった下楠が英文学評論集の出版企画の協力を東氏に依頼することでスタートした。東氏がかつて編集長であった雑誌「幻想文学」を若き日に手にして心躍らせたことがある方は、ぜひ本書を手にとっていただきたい。同志社で教鞭を執っている教員諸氏の論も、英文学科の白井雅美教授・大沼由布准教授・金津和美准教授・金谷益道教授をはじめとして、多数収録されている。

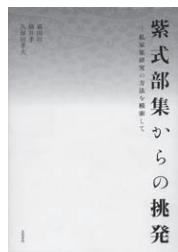
著者より

本書はこの画期的な発見・調査の経緯を一般の読者にもわかりやすく書き下したもので、特に地形学や火山灰層序学の成果から砂原遺跡の下層の石器が約12万年前、上層が約11万年前と推定できることを平易に説明している。

著者らのその後の努力で、松江市板津遺跡からは13〜18万年前の地層に包含されていたと考えられる石器が発見され、雲南市掛合遺跡からもほぼ同時期の石器が採集されている。砂原遺跡が日本列島で孤立していないことも明かになった。

本書には古代探究に燃えた2人の学者の衰えぬ情熱があふれている。本書を手にとった中高生の中から未来の成瀬、松藤が生まれることを期待したい。

今、出雲から目を離すことができない。故森浩一同志社大学名誉教授は「考古学は地域に勇気を与える」という名言を発したが、本書を読み終え、森先生がこの言葉が思い浮かんだ。麻柄一志(魚津市史編纂室長)



笠間書院 5,940円(税込)

紫式部集からの挑発

廣田収(天文学部教授)・久保田孝夫・横井孝著

晩年にわが人生を振り返った時、沢山の人たちと出会えた幸せなものだったと総括できる人と、良いことも悪いことも均(なら)してみると差引ゼロだったと諦観する人と、すべて別ればかりの辛い人生だったと悲観する人とがいるであろう。紫式部は間違いなく最後の事例に属する。それはおそらく、幼くして母と、結婚して間もなく夫を亡くした彼女の背負った心の傷の深さゆえである。紫式部は、いうまでもなく「源氏物語」の作者として知られている。ただ、彼女の人生の詳細については殆ど



プレーンセンター 2,160円(税込)

再び大阪がまんがが大国に甦る日

竹内オサム(天文学部教授)他著

戦後、物語性の強いマンガ、いわゆる「ストーリー・マンガ」が大流行する。その普及に大きな役割を果たしたのが、手塚治虫であった。その手塚はもともと大阪の出版社で4、5年のあいだ、マンガの単行本を描き下ろして生活していた。

さらに手塚がデビューして十数年のうちに、今度は手塚カラーとは異なるマンガが流行を生む「劇画」である。実はその劇画の拠点も大阪だった。

このように、大阪はマンガの発展と大きく関わり合う。しかし、現在の大阪あるいは関西の

何も記録が残っていないために不明である。その中で、彼女の苦悩と思惟とをこれほど直截にうかがわせる文献は他にない。彼女の残したこの家集は、その冒頭に、再会した幼馴染との寒々とした冬における別れを詠んだ歌、あの『百人一首』の歌「めぐりあひて」を据える。まるでこの歌を詠むためにだけ、苦難に満ちた彼女の人生があったといえるほどの歌と読める。いやそのように読ませようとするしわざこそ、古代においては実に異例で破天荒な企てであった。他の有名な歌人たちとは違い、物語作者である彼女ならではの等閑視されてきた彼女の家集が、現代の私たちに何を訴えてくるのか耳を澄まして聞き取るのではないかと。それはまさに、私たちを挑発し続けるテキストであるということを、8本の論文と2回の鼎談でもって論じ尽くした挑発的な書である。

廣田収

マンガ出版の状況を見ると、かつてのような勢いがいない。

今回出版した『再び大阪がまんがが大国に甦る日』という本は、そうしたマンガの過去と今を再考しようとする試みにほかならない。現状は打破できるのか。復興のために、今後どういった手だてが考えられるのか。そうした問いを、これまで大阪のマンガ出版に関わった編集者、マンガ家、評論家、研究者に問うという企画となっている。

すべて描き下ろしてはない。本の内容は、2013年秋に大阪府立大学で、5回に渡って開催された「新なにわ塾」の記録に基づく。それをベースに各講演者が加筆して本書が成り立っている。筆者は、手塚治虫の関西での活躍について執筆した。もともと関西は、絵本や漫画新聞などの出版が盛んであった土地柄であり、その土壌のなかにマンガ文化が開いたという経緯を記している。

著者より



東信堂 3,888円(税込)

トランスナショナル高等教育の国際比較

山田礼子(大学社会学部教授)他著

近年、国境を越えて提供される高等教育が急速に進展している。こうした高等教育は、教員、学生、プログラム、教育機関、または教材が国境を越えて提供されることと定義されており、その方法には学生の留学、海外分校での学び、遠隔教育など多様な形態が含まれている。教育や学位の輸出、あるいは留学をしない留学を通じて費用の軽減が可能になるなど、提供国および受容国の双方に利益がある新たな留学の形態が誕生している。本書は、今までの留学のパラダイムを転換する新たな留学の概念をトランスナショナル高等

教育として定義し、その展開について提供国、受容国の双方のケースから提示し、効用、課題、問題点を明らかにしている。18章から成り立つ本書の第1章では、トランスナショナル教育の概念について理論的なアプローチから明確にした上で、前半6章は提供国の側に焦点を当て、後半の11章は受容国の側に焦点を当てている。

かつて多くの海外大学のブランチ・キャンパスが存在していた日本であるが、現在はそのほとんどが撤退し、日本は本書で扱う提供国および受容国のいずれにも属していない。しかし、他国の大学との2重学位が日本の高等教育においても進展し、これからは共同学位の提供も可能となる。政府のスーパーグローバル大学の選定など新たな高等教育の国際化政策が展開しつつある現在、本書は日本の高等教育政策の世界展開を検討する上で、貴重な文献と位置づけられよう。

著者より



論創社 1,944円(税込)

メディアリテラシーとデモクラシー

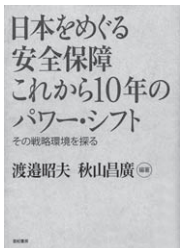
渡辺武達(大学社会学部教授)著

「メディアリテラシー」とはメディアの提供情報を正しく読み解いて社会参加し、自らも「デモクラシー」強化のために発信する権利と義務と能力のことである。コンピュータが一般化した1980年代初め、文部科学省のメディアリテラシー教育の中心はパソコンの使い方についてだった。筆者は97年に『メディア・リテラシー』(ダイアモンド社)を出し、メディアの基本活動原理として提唱してきた「積極的公正中立主義(Proactive Imparity)」の立場からそれ

を批判した。本書は前者「メディアへの希望」とのペアで、ハッチンス報告書「自由で責任あるメディア」の精神を受け継ぎ、情報の自由とデモクラシーの枠組みを提示、具体例としてメディアが誤報した「STAP細胞」作成や特定秘密保護法などを論評、東日本大震災報道を例にメディアと防災・減災情報提供のあり方や社会のもう一つの災禍である「戦争」報道について、P・アーネットとの対話を収めた。

人間の学習過程は個人の家庭環境(直接体験)、学校教育(制度的国民学習)、メディア接触(生涯社会学習)の3つになるが、最後が弱ければ個人が体験できないことや過去の社会的失敗は生かせない。最低でもジャーナリズムは「日々の出来ごと」の意味について、他の事象との関連のなかで理解できるように、事実には忠実で、総合的かつ理論的に説明すること(「自由で責任あるメディア」)を求められている。

著者より



垂紀書房 2,700円(税込)

日本をめぐる安全保障これから10年のパワー・シフト

浅野亮(大学法学部教授)他著

この本は、2013年に防衛戦略研究会が発表したレポート「2010年代の国際環境と日本の安全保障」を基に、改めて編集されたものである。3部に分かれ、日本、アジア、そして新しい安全保障問題(海洋、宇宙、サイバーなど)を扱っている。

防衛戦略研究会は、1999年に防衛研究所に設立された。国家安全保障会議のような政府機関の設立が望まれたが、まず民間の専門家や学者を中心に発足した。設立の背景には、経済と安全保障の国際環境が大きく

変化し、米中間を中心に「パワー・シフト」が進んでいると見られていたことがある。

この紹介を書いている筆者も、2004年から研究会に参加した。各分野の第一人者の中に混じっての議論は刺激的で、発表への批判は辛辣極まりなく、自信たっぷりな態度でも、実際には論理が混乱し、資料の信頼性のチェックもないような発表者は論外であった。

本書は、時事問題の説明ではなく、国際関係論を批判しつつ使う長期的な立場の分析が多い。しかも、提言を急ぐ前にまず冷静な分析を十分に行うという鉄則が守られている。当然だが、本書は、問題の設定そのものを徹底的に吟味している。問題設定を間違ったら、どんなに努力しても成果は上がらない。この点はビジネスにも通じるので、そのような見地から読むこともできるだろう。終章の渡邊論文はまさに名人による読み応えのある分析である。ぜひ読んでほしい。

著者より



成文堂 4,536円(税込)

法実証主義の現代的展開

濱真一郎(大学法学部教授)著

法哲学は、今日の法、法学、および法実践が抱えている基本的問題を、様々な角度から掘り下げて考えることを目的としている。法哲学の中心の問題としては、「法とは何か」「正義とは何か」「法的思考の特質は何であるか」という三つがある。

「法とは何か」という問いは法哲学上の難問である。法実証主義は、その難問に答えようと試みる立場の一つである。法実証主義の基本的主張は、自然法論との対比において示すことができる。自然法論は(1)自然法と実定法の二元論と(2)「法と道徳融合論」を主張する。対する法実

証主義は、(1)実定法一元論と(2)「法と道徳分離論」を主張する。本書は、20世紀を代表する法実証主義者の一人であるH・L・A・ハートおよびその理論的継承者たちと、法実証主義に批判的なR・ドゥオーキンのあいだの論争を検討することを通じて、「法実証主義の現代的展開」の一端を描き出そうと試みる論文集である。両者のあいだの論争は、多岐の論題に関係しているけれども、本書では特に、「司法的裁量論の擁護可能性」、「立法と司法の関係をどう捉えるか」という問題、および「記述的法理論の擁護可能性」について検討している。

本書で取り上げる法実証主義者たちは、以上の論題について検討する際に、「法に対して合理的で批判的な姿勢を吹き込もうとする試み」を念頭に置いている。今後、その「試み」を、講義を通じて学生たちに伝えていきたい。

著者より



明書房 1,944円(税込)

おさえとおこう!! 現代日本経済の基礎

西村理(大学経済学部教授)・加藤一誠著

日本経済に関する私たちの最初の書物は、1991年に刊行された西村理『日本経済の公式』(こう書房)であった。その後、加藤一誠氏が筆者に加わり『デッサン日本経済』(サイテック、1995・97年)、続いて『アウトロック日本経済』(萌書房、2008年)を出版した。本書は数えて5冊目である。およそ25年の間に日本経済が大きく様変わりしたため、書き換える必要が生じ執筆を重ねてきた。経済は生き物であるがゆえに毎日様々な経済ニュースを新聞やTVなどで見聞きする。とこ

ろが、このような経済ニュースは断片的で、経済全体の枠組みの中で相互に関連づけられなければ一過性になってしまう。そこで、統計資料を引用しつつ経済理論をベースに日本経済の特徴を理解しやすいように解説した。それ以外に本書の特色として、多くの標準的な教科書は数式やモデルで記述されているため初学者には理解しがたい面がある。それを解消するため出来るだけ言葉で記述するように心掛けた。したがって、まず経済学の入門書として読むことが出来る。さらに、数式やモデルで記述された教科書を読む際、サイド・ブックとして活用することで経済理論をより深く理解できるだろう。本書は3部構成で、第一部ではGDPなどマクロ経済学の概念が説明されている。そして、第二部では日本経済の需要サイド、第三部では供給サイドの現状が平明に解説されている。学生のみならず社会人にも紐解いて欲しいと願っている。

西村理



英宝社 2,160円(税込)

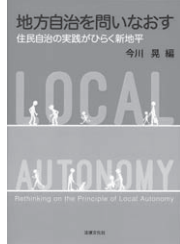
近現代イギリス小説と「所有」

南井正廣(大学グローバル学部に所属)著

本書は、日本英文学会第85回大会(2013年)でのシンポジウム「近現代小説と所有」に基づいている。まず、南井正廣がヘンリー・フィールディングの全小説と、治安判事として執筆した論文を合わせて分析し、土地所有や財産所有の問題と法との関係を論じている。次に高桑晴子(お茶の水女子大学)がアイルランドの『ピックハウス小説』における土地へのこだわりや所有の正当性への不安に言及している。続いて、三宅敦子(西南学院大学)が19世紀の小説に描かれたインテリアや収集品を当時

の文化的な背景に照らして分析し、「所有」と中産階級のアイデンティティとの結びつきを述べている。最後に、山本史郎(東京大学)が20世紀小説に描かれる「愛を「所有欲」の観点から分析し、ヒトがヒトを所有する場合、所有する者が、同時に所有される者なるというパラドックスを指摘している。従来、シンポジウムをまとめた本は、パネラーの発表原稿を加筆修正したものを併載する論文集にとどまることが多いのだが、本書では「シュンボシュオン」という最終章を付けて、研究対象の異なる4人の研究者が「所有の正当性とは?」、「所有によつて益するのは誰か?」、「所有と階級問題の関わりとは?」、「ヒトを所有することの意味とは?」、「所有のパラドックスとは?」、「所有の問題を縦横に論じている。イギリス小説と所有」というテーマの持つ可能性や深さを感じ取っていただければ幸いである。

著者より



法律文化社 2,700円(税込)

地方自治を問いなおす —住民自治の実践がひらく新地平—

今川晃(大学政策学部教授)編著

すべての個人が、人格のある人間として尊重されるべきことは言うまでもない。しかしながら、このことを前提にこの国が、地方自治を問直すことは未だなされていない。本書では、憲法で規定する「地方自治の本旨」について、地方自治の実態の分析を通じて、根本的なパラダイムの転換の必要性を説こうとするものである。「住民自治」が「団体自治」のあり方を規定すると認識しない限り、個人の人格の尊重を起点とした、改善・改革はなされないが、このような憲法解釈は広く受け入れられることはなかった。

著者より

ところが、この国の過去を振り返ってみれば、高度経済成長のひずみである公害や自然環境破壊の反省、あるいは文化や歴史の観点も含めて「豊かさ」を問直すことにより、私たちの生活を起点として、法律の改正や行政運営の改善にまで導いた事例は少なくない。

地方分権時代にあつても、「地方自治の本旨」の解釈でも、実際の行政運営においても、住民によるコントロールの推進や価値基準の転換という点では、依然として厚い壁が立ちはだかつていたために、地方自治の研究姿勢や価値観も問われるところである。さらには、グローバルな時代に生きるには、地方自治の領域でもパラダイムの転換が必要である。したがって、広く世に問うために、ひとつの「学派」の形成の必要性を感じつつ、同志である編者の門下の研究者を中心に本書の構成を行ったのである。



中央経済社 3,456円(税込)

日本の資本主義と会社法

森田章(大学司法研究科教授)著

本書は、これまで約40年の研究成果を集大成したものである。コーポレートガバナンスを中心にまとめてあるが、日本の資本主義は、経済のグローバル化という現象に直面しており、その発展のためには、企業がリスクテイクできるような法的インフラが必要であり、そのための会社法改正が喫緊の課題であることを指摘した。わが国の文化的な伝統から、株主利益の最大化に向かうことには限界がある。このような特色を機能させるコーポレートガバナンスは、財務情報の信頼性の確保や法令遵守

を日常的に監査する監査役制度によつて達成されてきた。そこで、わが国の監査役制度が、グローバルな機関投資家にも理解してもらえらるよう広報していくことが必要となる。さらに、強調したのは、憲法改正の際には国家との関係で「営業の自由」という概念を憲法に明文規定を定めることである。営業の自由に対する国家の不当な干渉に対して、被害者からの差止請求や国家賠償法による救済を認めるべきであろう。憲法上の私有財産権がおろそかであつてはこれに基づく株主権も怪しくなり、資本主義の根本が危ういことになる。会社は、憲法によつて保障された営業の自由によつて活発な経済活動に尽力すべきであり、他方でそのようなリスクテイクの経営判断が失敗したとしてもその責任を会社経営者に厳しく問う現行法制は、直ちにこれを廃止すべきである。営業の自由を確保することによつて、資本効率の追求が可能となる。

著者より

美の中断



見洋書房
3,024円(税込)

村上真樹(大学高等研究教育機構助手)著

私たちの生活にとつて、美は欠かすことができません。美しい風景や芸術作品は日々の生活に活気や潤いを与えてくれます。そして私たちは、外見的にも内面的にも、できることならば美しくありたいと願っています。しかしその一方で、美は時として私たちを強迫観念的に呪縛します。本書では、ドイツの批評家ヴァルター・ベンヤミンによつて成された美に対する批判を検討することによつて、「否定美学」とも「救済の美学」とも呼ばれる彼の美学を明らかにすることを試みています。

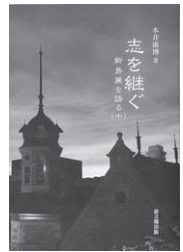
その際に手がかりとなるのは

「見かけ」を意味する「仮象」という概念です。ベンヤミンはこの仮象概念を用いてゲーテの小説『親和力』に登場する3人の娘について論じています。彼女たちは美に対するそれぞれ違った立場を代表しているのであり、本書はそのような美の区分を、カント、ヘーゲル、ニーチエといった他の哲学者との比較を通して紐解いてゆきます。それはまた、当時の社会状況に対してベンヤミンがどのような立場を取ったのか、そして写真や映画といったメディアをどのようにとらえていたのかを明らかにするための作業でもあります。

ベンヤミンにおいても、美が人間にとつて必要不可欠なものであるということには変わりありません。しかしながら彼は、瞬間的な美の中断にこそ、救済の可能性を見出しました。本書が美という価値観について立ち止まって考えるための一つのきっかけになればと思います。

著者より

志を継ぐ



思文閣出版
2,052円(税込)

—新島襄を語る(十)—

本井康博(元大学神学部教授)著

「新島襄を語る」シリーズの最終巻である。10年の間に10巻が刊行された。その間、新島八重について語った別巻も、4冊刊行された。全巻を貫くのは、わかりやすさ(読みやすさ)と専門性の絶妙なバランスである。

『志を継ぐ』は、シリーズを締めくくるのにふさわしいタイトルである。シリーズ全体の中心主題は新島襄であるが、新島の志を継いだ者たちについても、幅広く扱われてきた。本書では、徳富蘇峰、安部磯雄らが取り上げられている。「今、先生が居られたら、どうだろう? 私のし

ていることを見られたら、どう思われるだろう、と常に考えるのであります」と安部は書き残す。安部の言葉は、新島と同時代を生きた「同志」たちに共有された思いでもある。著者によれば、新島は「同志」に特別な意味を込めた。「同志社」という名も、我々はすでにできあがった固有名詞、法人名として使うことに慣れきっているが、同志社は「新島の志を継ぐ同志」がいなければ、本来成り立ち得ないという。

建学の精神を看板とするだけでは、同志社は同志社であり続けられない。今を生きる力として精神や理念を取り戻すためには、それらを語り続ける必要がある。類い希なストーリーテラーとして語り続けてきた著者の語りかけに耳を傾けてみよう。読者一人ひとりが、新たな語り手となり、志を継ぐ者となるための豊富な素材を、本書およびシリーズ全体がふんだんに提供してくれていることに気づかされるだろう。

小原克博(大学神学部教授)